

肥料&農薬技術情報

1. 今月の農作業
2. 柑橘園での土づくり&春肥を実践しましょう
3. 病害虫管理
4. 麦類赤かび病の防除について

1. 今月の農作業

3月1日～3月28日までの天候見通し

四国地方	平均気温(1か月)	降水量(1か月)	日照時間(1か月)
各階級の確率	低:20% 並:40% 高:40%	少:40% 並:30% 多:30%	少:30% 並:40% 多:30%
平年比	平年並か高い見込み	ほぼ平年並の見込み	ほぼ平年並の見込み

令和7年2月27日 高松地方气象台 発表

《麦》

○栽培管理

今年は1月から低温少雨傾向で麦類の生育がやや遅れぎみとなっているため、はだか麦、小麦ともに出穂期が平年並からやや遅いと予想されますが、気象動向をこまめに確認し、適期作業に努めましょう。

莖立ち～出穂期を迎えると肥料を最も必要とするため、播種時期に応じて穂肥を適期に施用し、収量確保に繋げましょう。

また、**麦は湿害に非常に弱い作物**のため、しっかりと**排水対策**を行いましょう。

○穂肥

穂肥の施用時期は「出穂前30～25日」であり、幼穂を確認し、幼穂長5～10mmを目安に施用しましょう。穂肥はNK化成で、10a当たり**チッ素成分で3kg**を施用して下さい。

なお、穂肥の増量は穂数を増加させますが、莖数の少ない条件下では、遅れ穂を誘発し、成熟の遅れや品質低下を招くため、施用量は基準量を超えないようにしましょう。

○湿害対策

3月は雨が多い時期にあたります。排水対策が不十分な圃場では、湿害の恐れがあり、収量や品質を大幅に低下させる原因となるので、**徹底した排水対策が必要**です。降雨後は圃場外へ排水できるように、**排水溝（明きょ）の確実な接続および補修**をあらかじめ行っておきましょう。

○赤かび病防除（項目4に詳細記載）

赤かび病菌が産生する**かび毒は人畜に有害**で、農産物検査では赤かび粒は混入してはならないとされており、極めて重要な病害です。

赤かび病の防除は、出穂時期が平年並であれば4月以降となるが、出穂・開花期が早まり気温15℃以上で連続した降雨があると3月下旬頃から防除が必要な場合があるので、麦の開花状況や天気予報、病害虫防除所の子のう孢子飛散情報をこまめに確認してください。

《水稻》

早期水稻の育苗

この時期はまだ寒い日が続き、苗立枯病やムシ苗が発生しやすいので、次の点に注意しましょう。

○用土の準備

育苗用土は**通気性**や**透水性**が良く、かつ**保水性**や**保肥力**が必要である。

市販の人工粒状培土などを用いる場合は、品質が保証されたものを用いる。

山土や水田土壌を用いる場合は、土壌のpHを4.5～5.0に調整する。

肥料は、苗箱当たり分量で**窒素およびカリは1g**とし、**リン酸**は過剰症が出る場合があるので**0.8g**とする。

○浸種、催芽

種子は塩水選と種子消毒を徹底する。

水稻の種子は1日の平均水温の積算が100℃になると発芽するので、それを目安に**10～20℃の水温**で浸種を行う。コシヒカリなど発芽しにくい品種はやや長めに浸種する。

出芽揃いを良くするため、浸種後の催芽を行う。**約30℃で高湿度の室内**で約1日間芽が出るのを促し、**ハト胸状態**にする。

○播種

早期栽培では、普通期栽培より育苗期間が長いため、播種量は催芽粉で箱当たり 160 g 以下の薄播きとする。

出芽は出芽室や育苗器内の暗黒下で、**28~30℃で2~3日保温**する。これ以上の高温になると立枯性病害が発生しやすいため、出芽室内の温度を上げ過ぎないように管理する。

○緑化・硬化

芽を伸ばしすぎると2段根になるので、**芽が5mm程度**伸びたら緑化に移る。

なお、緑化移行時に強い光や5℃以下の低温にさらすと葉緑素の形成が阻害されるので、育苗シート等で遮光と保温に努める。

緑化は、シルバーポリシートのトンネル育苗（次頁図）が簡易である。**昼間は20~30℃に保温・換気し、夜間は10℃以上に保温する**。4~5cm程度に伸びたら被覆をはずし硬化に移る。苗の根張りを良くするため、床土が過湿にならないよう注意する。また、低温時期の育苗では、地温低下防止のため午前中にかん水する。

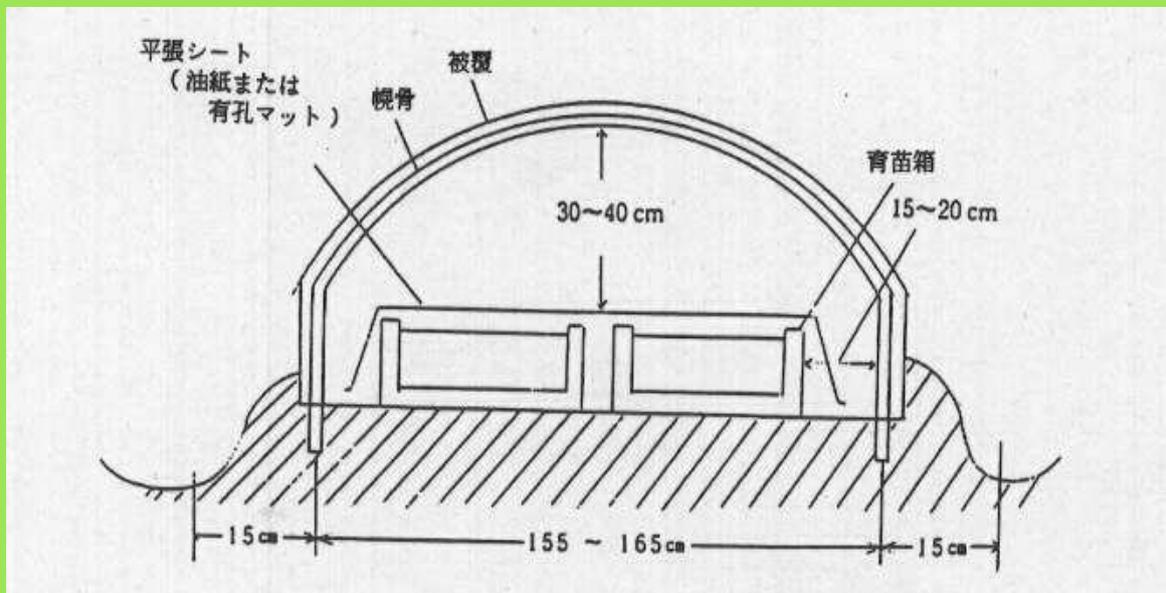


図 シルバーポリシートによるトンネル被覆の育苗図

(農林水産研究所)

《果樹》

○春肥の施用（柑橘・キウイフルーツ）

春肥は新梢の充実や開花、結実、幼果発育のために必要のため、発芽前の3月上旬頃を目安に施用して下さい（表1）。

表1. 春肥施肥基準

品種名	目標収量 (t/10a)	施肥時期	施肥成分量 (kg/10a)		
			チッ素	リン酸	カリ
極早生温州	4.0	3月下旬	6	5	5
極早生（マルチ）	4.0	3月下旬	7	5	5
早生温州（マルチ含）	4.0	3月下旬	8	6	6
普通温州（マルチ含）	4.0	3月下旬	9	7	7
早生伊予柑	4.0	3月上旬	9	5	6
甘夏柑	5.0	3月上旬	10	7	7
八朔	4.0	3月上旬	10	6	7
ネーブルオレンジ	3.0	3月上旬	10	8	8
不知火	3.0	3月上旬	6	4	5
		4月上旬	6	4	5
ぼんかん	3.0	3月上旬	9	6	6
日向夏	3.0	2月下旬	6	5	5
清見	3.5	3月上旬	9	7	7
河内晩柑	6.5	3月上旬	8	6	6
せとか	3.5	3月上旬	9	7	7
はれひめ	4	3月下旬	9	7	7
愛媛果試第28号	4	3月下旬	10	6	7
甘平	3.5	3月上旬	9	7	7
キウイフルーツ	2.5	3月上旬	3	3	3
レモン（露地）	4.0	3月上旬	8	6	6
ゆず	3.0	3月上旬	9	6	8

（愛媛県農林水産部農産園芸課）

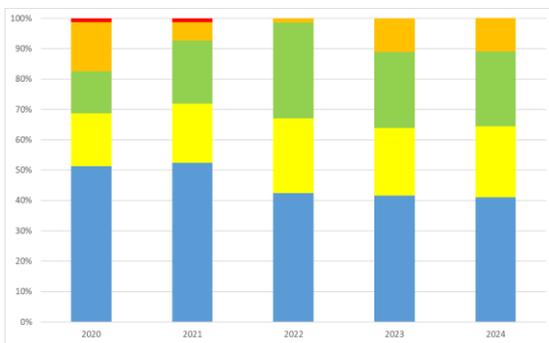
2. 柑橘園での土づくりを実践しましょう

JA 全農えひめでは、柑橘の定点土壌診断を実施しています。近年、過去にない豪雨や長期間の降雨が発生するなど異常気象の影響もあり、土壌が酸性化している園地が多くなっています。土壌酸度の矯正を積極的に進めることが重要です。一方、腐植については適正な園地がやや増える改善傾向となっています。今後も有機質資材を継続して施用し、肥持ちの良い土壌を目指しましょう。以下、定点土壌診断の過去4年の傾向（pH、腐植）と対策についてご紹介します。

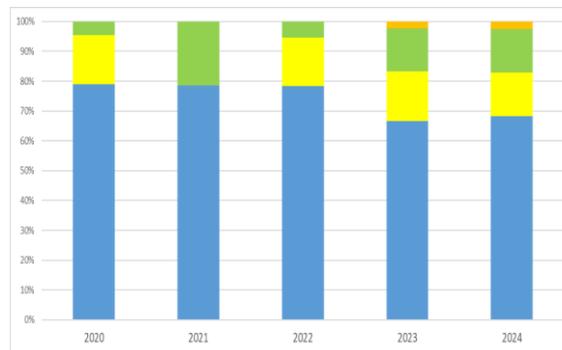
pHの現状

柑橘園地の適正 pH は 5.5~6.3 とされていますが、令和6年度に実施した定点土壌診断の結果では、低い園地・やや低い園地が温州みかんでは全体の 6 割以上、伊予柑では 8 割以上となりました。令和3年度から令和6年度の傾向は以下のとおりです。

愛媛県 温州みかん pH の分布割合



愛媛県 伊予柑 pH の分布割合



■ 高い
7.00 以上
■ やや高い
6.30~6.99
■ 適正
5.50~6.29
■ やや低い
5.00~5.49
■ 低い
4.99 以下

◆酸性化の原因

土壌中のアルカリ分が降雨などの影響で流亡すると、土壌は酸性を示すようになります。また、生理的酸性肥料（硫安や塩加など）の施用により酸性を示す陽イオンが土壌中に多く残る場合や硝酸態窒素が土壌に多くある場合に土壌の pH は低くなります。

◆酸性化によって何が起こるのか？（右図参照）

土壌が酸性化すると、土壌内部で肥料成分の溶解性と可給性が著しく衰えます。右の図のように酸性が強くなるとアルミニウムやマンガが活性化して植物に害を与えたり、りん酸を溶けにくい形態に変化させ、りん酸が吸収されにくくなったりします。



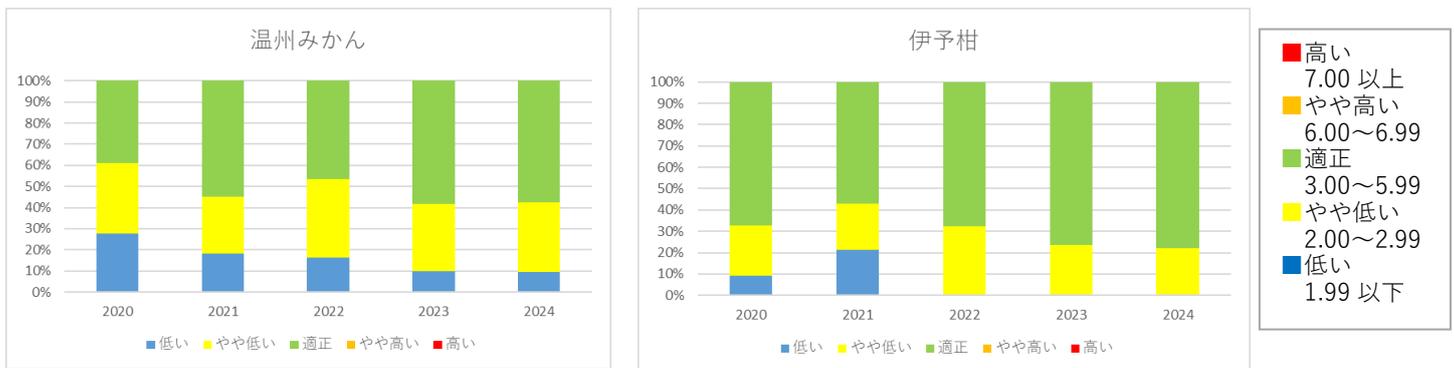
土壌のpHと肥料成分の溶解性・可給性

石灰資材紹介

苦土石灰	保証成分・備考	サンライム	保証成分・備考
	<p><溶性苦土：10% アルカリ分：53%</p> <p>・苦土と石灰を補給。</p>		<p>アルカリ分：46%</p> <p>・有機石灰のため、土を固めない。 ・苦土が保証されていないが、微量元素の補給が可能。</p>

腐植の現状

腐植の適正範囲は **3.00~5.99** です。低いあるいはやや低い園地が、温州みかんでは **4割程度**、伊予柑では **2割程度** を占めています。令和3年度から令和6年度の傾向は以下のとおりです。



◆腐植とは

腐植とは土壤に含まれる有機物のことで、土壤の物理性、化学性、生物性を良好にするための重要な物質であり指標です。有機物は時間の経過とともに微生物によって分解され、気温の上昇や耕うん作業等によって土壤の構造を破壊したり、酸素の供給量が多くなると分解がいつそう進み、有機物の量が減少していきます。また、有機物を施用しても土壤中の腐植含有量をすぐに上げることは難しく、堆肥やアツミンなどの腐植資材を連用して長年の集積効果を利用することが大切です。

腐植酸資材紹介

アツミン	保証、含有成分・備考	アツミン苦土石灰	保証、含有成分・備考
	<p><溶性苦土：3% 腐植酸：約50%</p> <p>・30~40kg 施用で堆肥1t分の腐植酸を補給できます。</p>		<p>アルカリ分：50% <溶性苦土：10% アツミン：10% (内、腐植酸5%)</p> <p>・苦土石灰にアツミンを10%加えた資材です。</p>

3. 病害虫管理

愛媛県病害虫防除所 (写真：愛媛県HP, 愛媛県農作物病害虫雑草図鑑)より

病害虫名	作物	発生予想量	防除上の注意	病徴
かいよう病	かんきつ	並	<ul style="list-style-type: none"> • 発芽期までに園地内に残存する発病枝・葉を除去し、園地の病原菌密度を下げる • 強風により枝葉が付傷すると発病が助長されるため、防風垣や防風ネットを整備する。 • 春先感染防止対策として、発芽前の薬剤防除を徹底する。ただし、ICボルドー66Dは、マシン油乳剤との散布間隔を14日以上あけ樹勢の弱い樹では使用しない。 	
ミカンハダニ	かんきつ	やや少	<ul style="list-style-type: none"> • 12～1月にマシン油乳剤を散布していない園地では、発芽までに散布する。但し、12～3月の冬期に2度散布しないよう注意する。 また、ICボルドー66D散布予定園では、マシン油乳剤を先に散布し、14日以上間隔をあけてから、ICボルドー66Dを散布する • 樹勢が低下した樹では、高度精製マシン油乳剤(97%)を使用する 	
かいよう病	柿(フルーツ)	<u>発生注意</u>	<ul style="list-style-type: none"> • 枝幹や枝の切り口等から樹液の漏出や枯死枝の発生が見込まれるため、園地の見回りにより初発を見逃さない。 • 結果母枝の棚付けは確実にを行い、園地の防風対策を強化するなどして、病原菌の侵入口となる枝のすり傷を防止する。 • 発芽・展葉期の感染予防として <u>ICボルドー66D : 50倍、</u> <u>コサイド3000 : 2,000倍、</u> <u>ムッシュボルドーDF : 1000倍</u> を発芽前に必ず散布する。 	 <p>新芽の萎凋・枯死</p> <p>多発園地の状況 (ハイワード)</p>
ハダニ類	冬春いちご	並	<ul style="list-style-type: none"> • 気温の上昇に伴い密度が増加しやすくなるため、早期発見に努め、発生が見られたら早急に防除する • ローテーション防除を実施する。 • 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさない薬剤の選択に留意する。 	

病害虫名	作物	発生予想量	防除上の注意	病徴
アブラムシ類	冬春 いちご	並	<ul style="list-style-type: none"> 圃場観察を行い、発生が見られたら早めに防除する。 天敵導入圃場では、天敵の活動に影響を及ぼさないよう薬剤の選択に留意する。 	
コナジラミ類	冬春 トマト きゅうり 冬春 いちご	並 やや少	<ul style="list-style-type: none"> 薬液が葉裏までかかるように丁寧に散布する。 本虫は多くの植物に寄生するため圃場内外の除草を徹底する。 ローテーション防除を実施する。 コナジラミ類は、きゅうりやトマトではウイルス病を媒介するので発生に注意する。 	
アザミウマ類	冬春 いちご	やや少	<ul style="list-style-type: none"> 主に花や果実に寄生するので発生が認められたら早めに防除する。 天敵導入圃場では天敵の活動に影響を及ぼさないように注意する。 本虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を行う。但し、除草によって施設内に飛び込む場合があるので注意する。 	 
ミナミキイロ アザミウマ	冬春 きゅうり	並	<ul style="list-style-type: none"> 薬液が葉裏までかかるように丁寧に散布する。 ローテーション防除を実施する。 本虫はメロン黄化えそウイルス(MYSV)を媒介するので、発生に注意する。 	
ベと病	冬春 きゅうり	やや少	<ul style="list-style-type: none"> 換気を図り、ハウス内の多湿を防止する。 適正な肥培管理に努める。 老化葉や発病葉は早めに除去する。 発病初期の防除に重点を置き、薬液が葉裏の菌叢に十分かかるように散布。 	
灰色かび病	冬春 トマト いちご 冬春 きゅうり	やや少 並	<ul style="list-style-type: none"> 日中は可能な限り喚起を行い、夜間は暖房温度を上げてハウス内の多湿を防止する。 過繁茂や軟弱な成育は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。 発病果や枯死茎葉は感染源となるので早めに除去する。 ローテーション防除を実施する。 	

病害虫名	作物	発生予想量	防除上の注意	病徴
うどんこ病	冬春いちご	やや少～並	<ul style="list-style-type: none"> ・伝染源となる発病葉、発病果や古葉はできる限り除去し、通風と薬剤の付着性を高める。 ・果実発病が中心となるため、発病初期の防除に重点を置く。 ・薬剤散布に当たっては、展着剤を加用し、葉裏や芽の間隙部に薬剤が附着するように丁寧に散布する。 ・ローテーション防除を実施する。 	
ネギアザミウマ	たまねぎ	並	<ul style="list-style-type: none"> ・薬液が葉の基部までかかるように丁寧に薬剤散布する。 ・ローテーション防除を実施する。 ・本虫は多くの植物に寄生する為、圃場内外の除草を徹底する。 ・本虫はアイリスイエロースポットウイルス（IYSV）を媒介するので発生に注意する。 	
白色疫病	たまねぎ	並	<ul style="list-style-type: none"> ・圃場観察を十分行い早期発見に努める。 ・排水不良の圃場での発生が多いため、降雨後の排水に努める。 ・発病葉や枯死した葉は感染源となるため適切に処分する。。 ・水媒伝染するため降雨前後の防除が重要となる。 ・展着剤を必ず加用し丁寧に散布する。 	
ベと病	たまねぎ	やや少	<ul style="list-style-type: none"> ・越年罹病株（葉の黄化・色あせ・草丈が小さく葉身に粉状の灰褐色の分生子が付着した株）は見つけ次第抜き取り処分する。 ・早生種では、球の肥大気になると葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察をして発病初期からの防除に努める。 ・気温が 15℃以上で曇雨天が続くと多発しやすいので注意する。 	 <p>越年罹病株 (一次伝染株)</p>

4. 麦類赤かび病の防除について

赤かび病の発生した麦は売れません！

赤かび病被害粒の混入率が0.04%(4粒以下/10,000粒)
を超えると規格外となり販売できません。
赤かび病が発生しないように注意しましょう。

病徴

乳熟期ころから穂の全体、あるいは一部の粒が褐変し、穎の合わせ目から紅色粉状の**かびの塊**を生じる。刈り取り期頃は病斑部に黒色の小粒が作られる。

発生生態

3~4月になると、稲刈株や枯死したイネ科雑草などの上に、子のうを形成する。
15℃以上の暖かい雨が連続して降ると、子のう胞子が飛散して、麦穂に付着して5~7日で発病する。
出穂期から乳熟期にかけて気温が高く、雨や曇天が続くと被害が大きくなる。

防除のタイミング

本病は開花期~10日頃が最も感染しやすい。
そのため**開花始期~開花期**に薬剤を散布する。(開花期：40~50%開花した時期)
この時期を逃すと防除効果は著しく低下し、実質的な防除は見込めません。
1回目の散布後も曇雨天が続く場合は7~10日後に2回目の薬剤散布を行う。

薬剤は次頁の表を参照



はだか麦赤かび病



小麦赤かび病

はだか麦 防除薬剤（例）

粉剤（そのまま散布）

薬剤	使用量	使用時期	本剤使用回数
ワークアップ粉剤 DL	3kg/10a	収穫 7 日前まで	3 回以内
トップジン M 粉剤 DL	4kg/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内

水和剤・フロアブル剤

薬剤	使用量	使用時期	本剤使用回数
ワークアップフロアブル	2,000～ 3,000 倍	収穫 7 日前まで	3 回以内
トップジン M 水和剤	1,000～ 1,500 倍	収穫 30 日前まで	3 回以内 (出穂期以降は 1 回以内)

無人航空機による防除薬剤（水 0.8ℓ/10a に希釈して散布）

薬剤	使用量	使用時期	本剤使用回数
ワークアップフロアブル	10～24 倍	収穫 7 日前まで	3 回以内
トップジン M ソル	8 倍	収穫 21 日前まで	3 回以内 (出穂期以降は 1 回以内)

小麦 防除薬剤（例）

粉剤（そのまま散布）

薬剤	使用量	使用時期	本剤使用回数
ワークアップ粉剤 DL	3kg/10a	収穫 7 日前まで	3 回以内
トップジン M 粉剤 DL	3～4kg/10a	収穫 14 日前まで	3 回以内 (出穂期以降は 2 回以内)

水和剤・フロアブル剤

薬剤	使用量	使用時期	本剤使用回数
ワークアップフロアブル	2,000～ 3,000 倍	収穫 7 日前まで	3 回以内
トップジン M 水和剤	1,000～ 1,500 倍	収穫 14 日前まで	3 回以内 (出穂期以降は 2 回以内)

無人航空機による防除薬剤（水 0.8ℓ/10a に希釈して散布）

薬剤	使用量	使用時期	本剤使用回数
ワークアップフロアブル	10～24 倍	収穫 7 日前まで	3 回以内
トップジン M ソル	8 倍	収穫 21 日前まで	3 回以内 (出穂期以降は 1 回以内)

